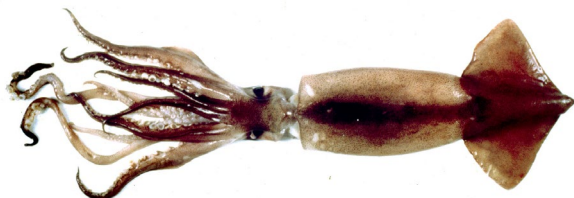


## 海外イカ類

### アルゼンチンマツイカ (Argentine shortfin squid *Illex argentinus*)

### アメリカオオアカイカ (Jumbo flying squid *Dosidicus gigas*)



アルゼンチンマツイカ



アメリカオオアカイカ

#### はじめに

アメリカオオアカイカ及びアルゼンチンマツイカにスルメイカを加えた 3 種は、その漁獲量の多さから世界三大イカ資源と言われている。我が国のいか釣り漁船はスルメイカを除く上記 2 種を対象とした漁業は現在行っていないが、我が国ではこれらも加工原料として多く利用されているため、上記 2 種を主体に漁業、生物学的特性、資源状態等に関する情報を紹介する。また、それ以外に海外で漁獲されているイカ類または未利用のイカ類についても補足的に最近の動きや利用・用途等について紹介する。

#### 管理・関係機関

##### 【アルゼンチンマツイカ】

本資源の大部分はアルゼンチン排他的経済水域 (EEZ) 及び英領フォークランド (マルビナス) 諸島周域 150 海里的暫定保護管理海域 (Falkland Islands Interim Conservation and

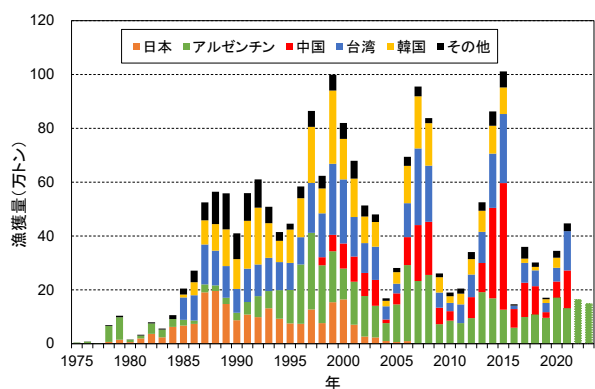


図 1. アルゼンチンマツイカの国・地域別漁獲量 (1975~2022 年)

FAO (2023)、2022・2023 年のアルゼンチン漁獲量は MAGYP の集計値を引用 (MAGYP 2023)。2023 年は 9 月 30 日までの暫定値。

Management Zone : FICZ) 内に分布し、現在は英国及びアルゼンチンの二国間の南大西洋漁業委員会 (South Atlantic Fisheries Commission : SAFC) に基づき、EEZ 内の資源について両国が共同で管理を行っている。

##### 【アメリカオオアカイカ】

南太平洋地域漁業管理委員会 (SPRFMO)、本種の沿岸漁業国で設立された CALAMASUR (Comité para el Manejo Sustentable del Calamar Gigante : 南太平洋アメリカオオアカイカ持続的管理委員会) により管理が行われている。

##### 【その他、イカ類 (ニュージーランドスルメイカ、カナダマツイカ)】

ニュージーランドスルメイカの資源管理ならびに漁業管理はニュージーランド政府によって同国 EEZ 内で行われている。カナダマツイカの資源管理ならびに漁業管理はカナダの管轄海域では北西大西洋漁業機関 (NAFO)、米国の管轄海域では中部大西洋漁業管理委員会 (MAFMC) が行っている。

#### 最近の動き

##### 【アルゼンチンマツイカ】

我が国いか釣り漁船は 2007 年以降、アルゼンチン 200 海里水域、公海や英領フォークランド FICZ への入漁はしていない。2004 年には資源量が激減して資源の枯渇が危惧された。しかし、2005 年にアルゼンチン政府の要請を受けて実施した水産庁調査船「開洋丸」による若齢イカの資源調査では資源の回復が示唆され (Sakai *et al.* 2007)、実際、2005 年から急速に資源は回復した。それ以降、2007~2008 年の豊漁、2009~2011 年の不漁、2014~2015 年の豊漁等、大きな漁獲変動を繰り返すようになった。国際連合食糧農業機関 (FAO) 漁獲統計 (FAO 2023) によると 2015 年の漁獲量は 101.1 万トンであったが、2016 年は 14.7 万トンと一転して急激な不漁となり、2020 年は 34.5 万トン、2021 年は 44.7 万トンと回復傾向にあるもの

表1. アルゼンチンマツイカ主要漁業国・地域の漁獲量（万トン）の変遷（1975～2022年、FAO 2023）

チャーター制度が開始された1993～2006年までのFAOのアルゼンチンの漁獲量には日本船による漁獲量が含まれているため、アルゼンチンの漁獲量は日本船の漁獲量を引いた値とした。2020・2021年のアルゼンチンの漁獲量はMAGYPの集計値（MAGYP 2023）を引用、2022年は9月30日までの暫定値。

年	日本	アルゼンチン	韓国	台湾	中国	英領						合計
						フォークランド (マルビナス)	バヌアツ	ポーランド	ウルグアイ	スペイン	英国	
1975	—	0.4	—	—	—	—	—	—	0.1	—	0.0	0.5
1976	—	0.7	—	—	—	—	—	—	0.1	—	0.0	0.8
1977	—	0.2	—	—	—	—	—	—	0.0	—	0.0	0.3
1978	0.7	5.9	—	—	—	—	—	—	0.2	—	0.1	6.9
1979	1.5	8.4	—	—	—	—	—	—	0.5	—	0.1	10.4
1980	0.6	0.9	—	—	—	—	—	—	0.1	—	0.0	1.6
1981	2.0	1.1	—	—	—	—	—	—	0.3	—	0.0	3.3
1982	3.7	3.9	—	—	—	—	—	—	0.4	—	0.0	8.0
1983	2.4	2.9	—	—	—	—	—	—	0.4	—	0.0	5.6
1984	6.3	2.9	—	—	—	—	—	—	0.3	—	1.2	10.6
1985	6.7	2.2	1.1	8.3	—	—	—	—	0.0	—	2.2	20.5
1986	7.4	1.2	4.8	9.4	—	—	—	1.1	0.2	2.2	0.8	27.1
1987	19.1	3.0	9.0	14.8	—	—	—	4.8	0.3	0.1	1.4	52.5
1988	19.6	2.1	9.9	12.9	—	0.0	—	5.7	0.4	0.6	5.3	56.4
1989	14.8	2.3	13.6	11.8	—	—	—	5.0	0.6	0.2	7.5	55.8
1990	8.7	2.8	11.1	8.8	—	0.0	—	2.5	0.1	0.1	6.9	41.0
1991	10.9	4.6	17.8	12.4	—	0.0	—	2.6	0.2	0.1	7.4	56.0
1992	9.9	7.8	21.1	11.7	—	—	—	1.7	0.2	0.1	8.5	61.0
1993	13.2	6.4	12.9	12.4	—	—	—	0.6	0.4	0.1	5.0	50.9
1994	9.3	10.6	7.9	10.4	—	—	—	0.2	0.2	0.3	2.5	41.5
1995	7.6	12.4	12.4	10.0	—	0.0	—	0.03	0.4	0.4	1.3	44.6
1996	7.4	22.0	14.5	10.1	—	0.0	—	0.0	0.6	1.7	2.1	58.4
1997	12.7	28.4	20.8	18.6	—	1.1	—	—	2.1	2.5	0.2	86.5
1998	7.7	21.5	9.2	16.3	3.0	0.8	—	—	1.3	2.4	0.2	62.4
1999	15.4	18.9	27.2	26.4	6.1	1.0	—	—	1.4	3.1	0.4	99.9
2000	16.5	11.4	15.0	23.8	9.3	1.0	—	0.1	1.2	2.6	1.0	82.0
2001	7.1	15.9	14.3	14.7	9.4	0.9	—	0.1	0.7	4.1	0.8	68.0
2002	2.7	15.1	9.9	11.1	8.5	1.0	—	0.3	1.2	0.8	0.8	51.4
2003	2.3	11.8	9.1	12.4	9.6	1.0	—	—	0.6	0.5	0.7	48.0
2004	1.0	6.6	2.0	4.9	1.3	0.2	—	—	0.5	0.1	0.1	16.9
2005	0.6	14.0	4.3	3.6	4.1	0.7	0.0	—	0.8	0.0	0.1	28.1
2006	1.0	28.2	13.9	12.6	10.4	0.5	—	—	1.6	0.9	0.2	69.4
2007	—	23.3	19.4	28.5	20.8	0.5	—	—	1.6	1.2	0.3	95.5
2008	—	25.6	15.8	20.9	19.7	0.4	—	—	1.1	0.3	0.1	83.8
2009	—	7.3	5.7	5.6	6.1	0.2	—	—	0.2	1.0	0.0	26.1
2010	—	8.6	2.5	3.1	3.5	0.3	0.0	—	0.2	0.7	0.03	19.0
2011	—	7.7	4.0	7.0	—	0.5	0.2	—	0.1	0.9	0.2	20.5
2012	—	9.5	5.7	8.4	7.8	0.7	—	—	0.1	1.4	0.4	34.1
2013	—	19.2	7.8	11.6	10.8	0.3	0.2	—	0.1	2.3	0.1	52.5
2014	—	16.9	10.3	20.1	33.6	0.6	1.1	—	0.2	3.3	0.05	86.3
2015	—	12.7	9.9	25.7	47.0	1.5	1.3	—	0.1	2.8	0.2	101.1
2016	—	6.0	0.01	1.3	6.9	0.0	0.0	—	0.1	0.3	0.1	14.7
2017	—	9.9	4.0	7.4	12.8	0.4	0.3	—	0.04	1.2	0.03	36.0
2018	—	10.8	1.3	5.9	10.5	0.3	0.3	—	0.06	0.9	0.02	30.1
2019	—	9.6	1.4	3.4	2.1	0.0	0.2	—	0.1	0.3	0.00	17.1
2020	—	17.1	3.7	5.1	6.0	0.1	0.1	—	0.6	1.7	0.0	34.5
2021	—	13.2	0.0	14.6	14.0	0.1	0.6	—	0.6	1.6	0.0	44.7
2022	—	16.7	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
2023	—	15.2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

のかつての豊漁期の水準には至っていない（図1、表1）。本種資源は世界のイカ原料供給に大きな影響を与え、日本への影響も少なくない。近年の主たる漁業国・地域はアルゼンチン、中国、台湾、韓国である。

【アメリカオオカイカ】

FAO 漁獲統計（FAO 2023）と SPRFMO の公式報告によると、2021年のアメリカオオカイカ漁獲量は100.4万トンと頭足類では最も多い漁獲量の1つであり重要な資源である（図2、表2）。2021年の各国の漁獲量の内訳はペルーとチリがそれぞれ51.8万トンと5.4万トン、中国が42.2万トンと3か国で全体の大部分（99.0%）を占めている。特にペルー沖公海での中国の漁獲量は2011年頃から伸びている。本種は近年の世

界的な需要の高まりから国際的な加工原料となっている。主要沿岸国の1つであるペルーは、沿岸零細漁業者への保護対策として外国船だけでなく自国の中大型いか釣り船の操業をペルーEEZにおいて認めておらず、2012年1月以降、ペルーEEZでの日本船の操業ができない状態となっている。またチリも、零細企業の漁獲量が2012～2018年の9.7万～14.2万トンから2019年は漁場の沖公海により1.7万トンと激減した（Chilean Government 2020）。これにより2019年に一般漁業・養殖法が改正され、アメリカオオカイカの漁法について釣りのみを許可し、トロール等そのほかの漁法を禁止する法案が発表された（República de Chile, Ministerio de Economía, Fomento y Turismo 2019）。2023年9月に開催された第11回 SPRFMO 本委員会の公式報告によると、2022年の漁獲量

はチリ 9.8 万トン、中国 50.9 万トン、ペルー45.7 万トンであった (SPRFMO 2023)。

【その他、イカ類 (ニュージーランドスルメイカ、カナダマツイカ、トビイカ)】

ニュージーランドスルメイカは、ニュージーランド政府が自国水域内で操業する漁船を原則として自国船籍船に限るとの法改正を行ったことから、2016 年 5 月 1 日以降、同国の経済水域内で操業するには同国の船籍への転籍が必要となった (Ministry for Primary Industries 2016)。これを受け、当海域での我が国のいか釣り船は、2016 年漁期 (2015 年 12 月～2016 年 4 月) に操業した 1 隻が最後となり、その後撤退した。また日本籍のトロール漁船による操業も 2015 年にはなくなっている。近年の本種の水揚状況を総漁獲量ベースで見ると、2022 年は 3.3 万トン、2023 年は 10 月時点で 1.1 万トンとなっている (Fisheries New Zealand 2023)。ニュージーランドでは、上述したように外国籍漁船の操業ができなくなってから同国内でのいか釣り漁業はなくなり、トロール漁業によるのみニュージーランドスルメイカが漁獲されている (New Zealand Government 2023)。

カナダマツイカは、カナダの管轄海域では 1999 年以降、米国の管轄海域では 1987 年以降外国船の操業が許可されておらず、どちらの海域も自国船が操業している (NEFSC 1999、Hendrickson and Showell 2019)。2021 年の漁獲量はカナダが 1.2 万トン、米国が 3.1 万トンであった (Hendrickson 2022)。

トビイカも外洋性のアカイカ科 (Ommastrephidae) であるが、未利用イカ資源の 1 つとして開発が期待されている。本種はインド太平洋の熱帯・亜熱帯海域に広く分布し、その現存量は 800 万～1,100 万トンと見積もられているが (Nigmatullin 1990)、我が国の利用は殆どが沖縄県の小規模な漁業であり (当真 1971a、1971b、1971c、1972、嘉数 1982)、世界的にみても台湾 (Tung *et al.* 1973、Tung 1976a、1976b)、中国の一部で報告されているのみである。また FAO 統計 (Capture production) には種としての漁獲統計の記載はない。水産研究・教育機構ではこれまで水産庁漁業調査船「開洋丸」にて本種の資源状況の把握に取り組んできた。台湾東方沖合海域調査 (若林ほか 2016a) とフィリピン沖公海の調査 (若林ほか 2016b) では、漁獲対象の親イカの分布量、産卵生態 (稚子の分布量)、加入状態 (若齢群の分布量) 等を把握し、潜在的な資源が存在していることが示唆された。それを踏まえ、2018 年には水産研究・教育機構開発調査センターが当業船を用船し漁場開発調査を実施した (下光ほか 2019) が、2019 年時点でトビイカを対象とした新たないか釣り漁業はされていない。理由として、台湾東方沖合海域における本種の推定資源量は多いと考えられるが、分布海域が広域であるため、群れが薄く釣りによる漁獲は不向きであることが要因の 1 つと考えられる。他方、アラビア海の公海域では 2003～2005 年にかけて中国のいか釣り船団によって 5,000 トンのトビイカが漁獲されているが、他の有用なイカに比べて商業的価値が低いことから中国船の主対象魚種とはなっていない (Chen *et al.* 2013)。しかし、最近、船舶自動識別装置 (Automatic Identification System : AIS) と集魚灯を組み合わせた Global Fishing Watch

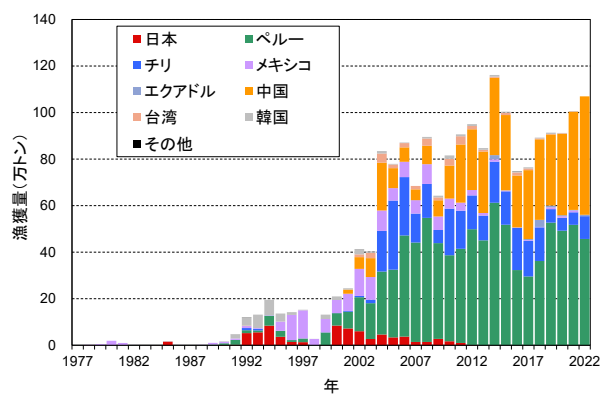


図 2. アメリカオアカイカの国・地域別漁獲量(1977～2022 年、FAO 2023)

2022 年の国別漁獲量は SPRFMO 会議報告 (SPRFMO 2023) からの暫定値。

による観察から中国いか釣り漁船の操業が確認されており (World Wide Fund for Nature and Trygg Mat Tracking 2020)、アラビア海に分布しているトビイカを対象にした操業を実施していると考えられる。同海域におけるイカを対象とした操業は灯光敷網漁船が主体と考えられ、集魚灯を使いイカだけでなくマグロ類も多く混獲しており、洋上における運搬船への漁獲物の積み替えが不明瞭である等、インド洋のマグロ類の保存管理を管轄するインド洋まぐろ類委員会 (IOTC) でもこの中国漁船による実態が報告されている (Trygg Mat Tracking 2022)。

利用・用途

我が国の大型いか釣り漁業はアルゼンチン、ペルー、ニュージーランド等の EEZ 内で入漁許可を得て操業し、その漁獲物を日本の水産・加工業者が利用していた。しかし、様々な理由により各国の EEZ 内での入漁許可がおりず大型いか釣り漁業は撤退を余儀なくされた。我が国では水産物の輸入が国内の漁業や水産物需要に悪影響を与えないよう、輸入割当制度 (IQ 制度 : Import Quota) によって毎年国内水産物の需給動向や市況等を勘案した輸入割当限度枠 (IQ 枠) が設定されている (三木・三木 2021)。大型いか釣り漁業の撤退以降、水産・加工業者は IQ 枠の範囲でその原料を確保しているが、IQ 枠に含まれない現地で 1 次加工または半加工した調製品原料が多く輸入されるため、海外イカの利用実態の把握は難しくなっている。また、国別のイカ輸入量 (冷凍品・調製品等) を貿易統計 (財務省 2023) より収集・分析している (三木・三木 2021)。2000 年前後から、冷凍品・調製品ともに輸入量全体に占める中国の割合が高い状態が続いている (図 3、4)。なお、令和 4 年度のイカの IQ 枠は追加枠も含めて約 10 万トンである (経済産業省 2023a、2023b)。さらに図 5 に示すように現在は、小売り等で販売されているイカ製品の DNA 分析を行い、我が国のイカ製品がどのようなイカ類を原料に製造されているのかに関する情報を収集している。

【アルゼンチンマツイカ】

漁場が遠隔地にあるため活魚や鮮魚での利用はないが、その

表 2. アメリカオオアカイカの漁業国・地域の漁獲量（トン、1977～2022 年、FAO 2023 及び SPRFMO 2023）

2021 年までの漁獲量は FAO（2023）の値を採用、2022 年の漁獲量については SPRFMO 報告書（SPRFMO 2023）による暫定値。2016 年と 2017 年のパナマの漁獲量は FAO（2023）には掲載されていないため、その他の漁獲量として SPRFMO（2023）の値を採用。

年	ペルー	チリ	メキシコ	エクアドル	日本	中国	台湾	韓国	その他	合計
1977	1		658							659
1978	0		1,635		7					1,642
1979	59		4,522							4,581
1980	0		19,068							19,068
1981	61		9,726							9,787
1982	888		264							1,152
1983	2		89							91
1984	7		364		9					380
1985	206		177		15,503					15,886
1986	870		269		94					1,233
1987	84		225							309
1988	852		885							1,737
1989	2,992		7,380							10,372
1990	7,441		5,630		1,348			474	210	15,103
1991	20,657	445	5,846		2,223			17,034	380	46,585
1992	12,695	9,400	8,549		52,015		1,698	36,101	1	120,459
1993	7,769	7,442	3,043		55,800			57,778		131,832
1994	42,838	205	1,800		84,205			66,386		195,434
1995	25,676		39,657		36,515			34,440		136,288
1996	8,138	2	107,967		14,297			11,784		142,188
1997	16,061		120,877		13,221			2,384		152,543
1998	547	5	26,611					201		27,364
1999	54,652	6	57,985		394			18,813		131,850
2000	53,795	9	56,153		84,481			15,625		210,063
2001	71,834	3,476	73,741		72,337	17,770		5,797		244,955
2002	146,390	5,589	115,896		60,246	50,483	12,064	21,759	1	412,428
2003	153,727	15,191	97,332		27,060	81,000	23,009	4,722	1	402,042
2004	270,368	175,134	87,228		46,187	205,600	39,450	10,787		834,754
2005	291,140	296,954	53,437		33,652	86,000	15,976	2,519		779,678
2006	434,261	250,989	65,611	212	37,428	62,000	18,349	2,485		871,335
2007	427,591	124,389	57,476	121	14,059	46,400	14,750	0		684,786
2008	533,414	145,667	84,437	668	14,143	79,064	31,161	6,775		895,329
2009	411,805	56,337	57,894		27,271	70,000	12,319	7,221		642,847
2010	369,822	200,428	42,893		17,113	142,000	29,206	14,506		815,968
2011	404,730	163,495	34,844		9,977	250,000	35,418	7,843		906,307
2012	497,462	144,965	23,157	91	1,448	261,000	14,177	8,310		950,610
2013	451,061	106,271	11,132	2		264,000	7,759	7,067		847,292
2014	612,444	176,602	9,977	18,146		332,523	4,795	7,203		1,161,690
2015	517,974	143,684	2,866	1,279		323,636	10,072	4,263		1,003,774
2016	323,337	180,914	1,597	485		223,300	12,989	4,388	842	747,852
2017	295,975	152,537	3,181	4,853		296,100	7,338	3,456	289	763,729
2018	362,232	144,646	1,789	30,204		346,200	3,848	3,500		892,419
2019	526,902	58,071	7,671	7,782		305,670	2,085	5,514		913,695
2020	492,362	55,006	7,318	4546		350,000	2,087	1,025		912,344
2021	517,710	53,569	7,901	2,458		421,971	665	0	3.6	1,004,278
2022	457,100	97,687		5,907		509,000	0	0		1,069,694

他の点では基本的に日本のスルメイカと同様である。肉質がスルメイカよりやや堅いため、刺身の需要は少なく、多くがするめ、さきいか、塩辛等の加工品となる。DNA を用いて量販店及びコンビニエンスストアで販売されている製品を解析した結果、本種の胴肉は一夜干しや乾燥珍味、鰯や足は主に乾燥珍味として利用されていた（若林ほか 2009）。2019 年に行った調査においても、加工製品原料の全体に占める割合は多くないものの、ぬれ珍味（塩辛、魚卵あえ）やするめ等に利用されていた。食用以外では、まぐろはえ縄の餌としても利用されてきた。

【アメリカオオアカイカ】

惣菜（天ぷら、フライ）やシーフードミックス等の冷凍品の原料となる。最近、アメリカオオアカイカを原料としたイカ加

工品は、従来のアカイカ系の主要用途である惣菜加工分野にとどまらず、ヒレ（耳）を使った塩辛やソフトタイプの乾燥珍味（さきいか、燻製）、さらに海鮮風カップ麺のフリーズドライ製品（タコ風のゲソ）等の分野にも拡大している。これらの加工品としての利用には原産地表示の義務はないため普及率は把握が難しいが、DNA 分析の結果、2013 年までは大手量販店やコンビニエンスストア等で販売されているイカ製品のうちスルメイカに次いで高い割合を占めていた（若林ほか 2009、2017）。図 5 に示すようにスルメイカの不漁の影響で、2017 年以降の調査では、スルメイカを抜き、最も原料種としての割合が高くなった（若林ほか 2009、2017、2020）。また、冷凍すり身ペースト、胴肉の打抜き式イカリング、フィレ等の加工品として世界的な用途が拡大しており、本種は国際的な加工原料となっている。一方、主要漁業国のペルーでは、最近年、同

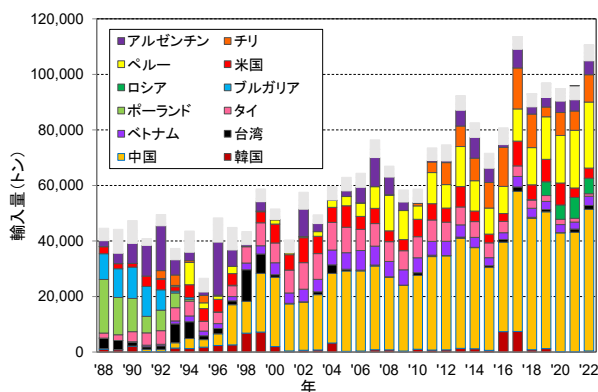


図 3. イカ冷凍品輸入量の推移 (1988～2022 年、財務省 2023)

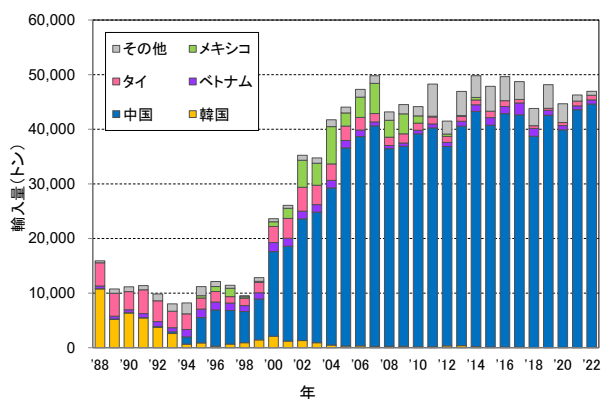


図 4. イカ調整品の輸入量の推移 (1988～2022 年、財務省 2023)

国北部海域で利用できる零細漁業の漁場が遠くなり、水揚げ時の鮮度が低下したことから食品加工原料ではなく魚粉に利用されることが多くなっている。2013 年のイカ魚粉の輸出金額は 1,840 万米ドル (FOB (free on board) 価格) に達し (平均価格 1.85 米ドル/kg)、主な輸出先はインドネシア (23.7%) とエクアドル (15.6%) で、ブラジル (6.9%)、日本 (6.7%)、米国 (6.5%) がそれに続いた (Paredes and De la Puente 2014)。

【ニュージーランドスルメイカ、カナダマツイカ、トビイカ】

ニュージーランドスルメイカは製品の原料種としての割合は低いが、スルメイカの代替として惣菜や冷凍食品に使用される (若林ほか 2017)。カナダマツイカはかつて日本でもスルメイカの代替資源としていか釣り漁船が利用していたが、資源が減少し外国船の操業ができなくなってからは利用がほとんどなかった。しかし、近年同資源が回復すると共に、スルメイカやアルゼンチンマツイカに次ぐ品質の良さから日本でも加工利用が進み、MSC 認証をとったカナダマツイカ製品が日本の大手量販店でも販売されている。トビイカはこれまで日本市場での利用がほとんどなかったが、世界の加工用イカ資源のひっ迫や高騰から 2017 年以降、乾燥珍味の原料として利用がみられるようになった (若林ほか 2020)。最近では中国からの冷凍イカ唐揚げ製品等にも使われている。

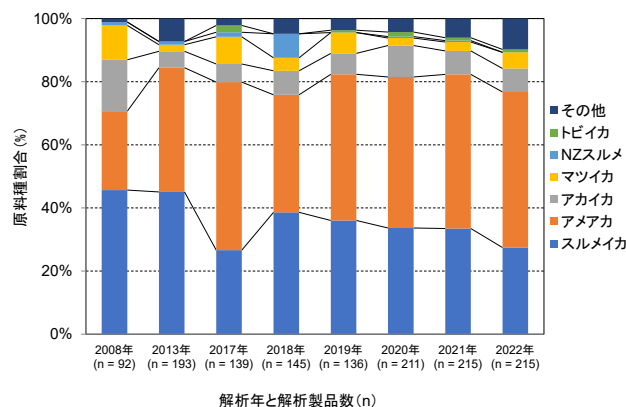


図 5. DNA 分析に基づくイカ製品の原料種割合の推移

アメイカ：アメリカオオアカイカ、マツイカ：アルゼンチンマツイカ、NZ スルメ：ニュージーランドスルメイカ。なお、解析対象は DNA 分析が可能な乾燥珍味、ぬれ珍味、惣菜、冷凍食品、カップ麺を対象とし、対象種が使用されていた製品数の割合で示している。

漁業の概要

【アルゼンチンマツイカ】

本種は、南西大西洋のアルゼンチン EEZ 内、公海域及び英領フォークランド FICZ 内にまたがって主漁場を形成する資源 (ストラドリングストック) である。過去には日本も漁獲していたが、現在は韓国、台湾、アルゼンチン、スペイン、さらに中国が主要な漁業国・地域である。1980 年代に日本等の遠洋漁業国のトロール船による本格的な操業が開始され、本種を対象とした漁業は急速に発達した。1984 年には台湾、1985 年には日本と韓国のいか釣り漁船が操業を開始し (ただし台湾の漁獲量が統計に記載されるようになったのは 1985 年から)、1987 年には十数か国・地域の漁船が操業することになり、総漁獲量は 50 万トンを超えた (図 1、表 1)。この年は、日本の漁獲量も前年比で約 3 倍の 19 万トンに増加した。この年以降、各国・地域による本種の総漁獲量は、1997 年に 90 万トン近くに急増するまでは 40 万～60 万トン前後で比較的安定していた。しかし、2000 年ごろから各国における漁獲量の減少とともに日本の漁獲量も減少に転じ、2005 年にはわずか約 6,000 トンまでに激減した。沿岸国のアルゼンチンの漁獲量は 1990 年代中頃から急増を始め、その後は 30 万トン程度の漁獲であったが、2004 年には 6.6 万トンに急減、2006 年には 28.2 万トンに急増、2009 年に再び急減する等、乱高下を繰り返していた。近年は 10 万トン前後で推移しており、2023 年のアルゼンチン EEZ 内の漁獲量は 9 月末時点で 15.2 万トンと報告されている (MAGYP 2023)。沿岸国のアルゼンチンを除く他の漁業国では、中国が主としてアルゼンチンや英領フォークランドの EEZ の外の陸棚付近で操業している。これに対して、ほとんどがさんま棒受網漁船との兼業である台湾のいか釣り船の多くは英領フォークランドの FICZ 内での操業許可を得て操業している (酒井ほか 2014)。

【アメリカオオアカイカ】

我が国のアメリカオアカイカ漁業は、海洋水産資源開発センター（現：水産研究・教育機構 開発調査センター）が1971/72漁期（漁期の定義は5月から翌年の4月まで）にカリフォルニア半島周辺で開発調査を行ったことに端を発する。その後、マツイカ及びアカイカ漁業の補完的資源として注目されるようになり、1984/85 漁期から同センターが本格的な調査を実施した（黒岩 1998）。我が国いか釣り漁船も1989年頃から操業を開始し、1991年までは主にメキシコ EEZ 内で操業を行った。一方、同センターが1989年にペルー EEZ 内において本種の高密度群を発見し、翌年からいか釣り漁船40隻余りが出漁し、4万～8万トンを漁獲し、南西大西洋のアルゼンチンマツイカ漁場に次ぐ重要な漁場となった。しかし、2006年以降は入漁隻数が4隻程度となり、さらに2011年にはペルー EEZ 内での操業海域を80海里以遠に制限されたことから漁獲量は減少し、2012年以降はペルー EEZ 内での操業許可が下りず、ペルー海域での我が国の操業はなくなった。現在、ペルーの EEZ 内では零細な沿岸いか釣り漁船のみに操業が認められている。ペルー国内の業界からは自国の大規模ないか釣り操業にも許可を出すようにペルー政府に要求しているようで、その漁法等も研究もされているが（Salazar-Céspedes *et al.* 2018）、未だペルー政府からの許可は出されていないようである。

FAO 漁獲統計によると、全世界のアメリカオアカイカ漁獲量は1991年頃から増加し、2000年には20万トンを超え、中国の参入とペルーの漁獲増加により2002年には40万トンを上回った（図2）。その後の中国、ペルー及びチリの漁獲増加により2年後の2004年には総漁獲量は約83.5万トンに達し、変動はあるものの以降は80万トン前後の高い漁獲量が維持されている。2014年に漁獲量は116.2万トンに達し、本種資源を漁獲し始めてから最大の漁獲量を更新した（表2）。これは、イカ・タコ類の単一種で世界一の漁獲量となっている。そのような状況によりアメリカオアカイカを中心とした世界的なイカの需要が拡大した（三木ほか 2010）。また最近

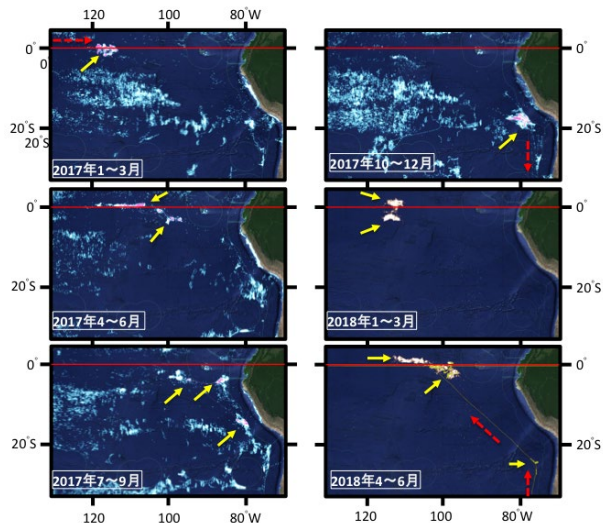


図 6. Global Fishing Watch で観察された 2017 年 1 月～2018 年 6 月の東部太平洋沖合における 3 か月ごとの中国いか釣り漁船の操業海域の変遷（酒井 2019）  
黄矢印は船団の位置、赤矢印は船団の移動方向を示す。

ペルー沖やチリ沖の公海域において、中国船を主体とする外国いか釣り漁船による操業が増加しており（水産庁 2013、Global Fishing Watch 2021、González Martín 2021）、図6に示すように2017年頃からさらに沖合の西経120～100度の赤道域での中国漁船による操業が急増している（酒井 2019）。その着業隻数は2000年の22隻から2020年は569隻と年々増加し、2020年には35.8万トンが漁獲された（SPRFMO 2023）。2022年の着業隻数は463隻と前年（476隻）と同程度であったが、漁獲量は前年の42.2万トンから増加し50.9万トンであった（SPRFMO 2023）。

### 生物学的特性

#### 【アルゼンチンマツイカ】

本種の寿命は1年であり、成熟して産卵した後は死亡する。魚の耳石に相当する平衡石には輪紋が観察され、この輪紋は日輪であることがわかっている。本種の成長は、日齢と外套長との関係で表される。孵化後、およそ100日目以降から急速に成長し、成長した親イカは外套長がおよそ25cmとなり、35cm以上に達するものもある（表3）。加入前の外套長5～10cmの幼イカの日齢は150～200日で、漁獲対象となる親イカの日齢は200日から寿命近くの350日までの範囲に及ぶ（表3）。本種は、産卵期と産卵場及び回遊分布経路の違いにより3～4の季節発生群が想定されている。このうち、南半球の秋～冬に産卵孵化する秋冬生まれ群は国際漁業にとって最も重要であり、索餌回遊期にはアルゼンチン沖の大陸棚上の南部に広く分布する。この南部海域の大きな資源をアルゼンチンでは「南パタゴニア系群」と呼び、その他の比較的小さな資源で北部に出現する「北ブエノス系群」、「春季産卵群」及び南緯46～48度の沿岸寄りの陸棚上に出現する小型の「夏季産卵群」とは区別して扱っている（Brunetti *et al.* 1998）。

本種の産卵に関しては、孵化間もない幼生が秋～冬（3～8月）に南緯35～36度の大陸棚斜面域に出現分布することから（Brunetti and Ivanovic 1992）、主産卵場は同海域で、主産卵期は秋～冬であると考えられている。このことは、南部海域で漁獲対象となる秋冬生まれ群（南パタゴニア系群）の平衡石を用いた日齢分析で推定された生まれ月からも検証されている。

また、これ以外にも南緯43度の沿岸から沖合で12～3月に仔稚が出現し、夏季産卵群の産卵場となっている。マイクロサテライトマーカーを用いた雌に植え付けられた雄の精莖（精子の入ったカプセル）の個体識別結果から、夏季産卵群は多い個体では5個体もの雄の精莖を持っており、精莖の植え付けられた状態から、多回産卵することが示唆されている（若林ほか 2010）。本種は索餌場が主な漁場となり、主な産卵場は漁場と分布が異なる（図7）。食性は、北に分布する群（北ブエノス系群等）ではハダカイワシ等、中深層性魚類を主体とするのに

表 3. アルゼンチンマツイカの日齢と体長

	日齢(日)	外套長(cm)
幼イカ	150～200	5～10
親イカ	200～350	20～35

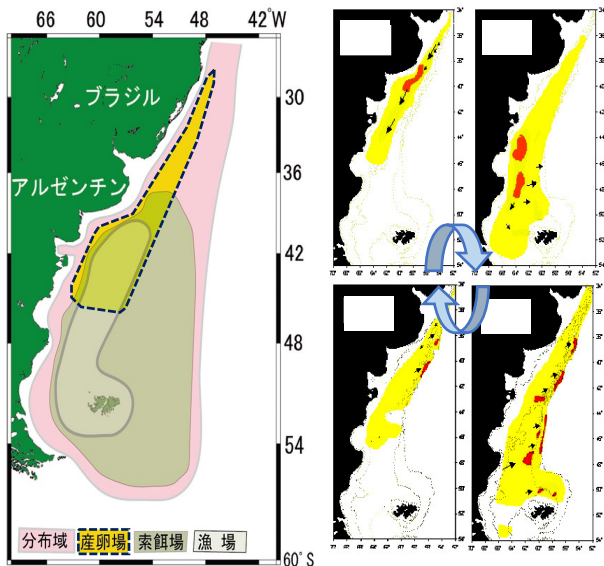


図 7. アルゼンチンマツイカの分布水域（左図）と季節的な漁場の分布（右図）  
右図は赤が主分布、黄色が分布可能範囲。

対して、南に分布する群（南パタゴニア系群等）ではオキアミ類や端脚類が主体となり、魚食は稀である（Ivanovic and Brunetti 1994）。

【アメリカオオアカイカ】

本種は、熱帯・亜熱帯域の外洋－沿岸性種であり、カリフォルニア沖からチリ沖にかけての海域に分布する（図 8）。成熟体長により小型、中型及び大型に区分され、後者は外套長が 120 cm に達するアカイカ科最大の種である（Nesis 1983）。小型は赤道付近及びカリフォルニア海流域だけに見られ、中型と大型はそれぞれ南北半球に分かれて分布する（Nesis 1983）。過去の遺伝情報に基づいた研究では、南北半球で集団が異なるとされていたが（Sandoval-Castellanos *et al.* 2010、Staaf *et al.* 2010）、最近では、遺伝的構造には南北半球で違いが見られず、核 DNA の遺伝情報から南北半球で同じ系統を保有するという研究（Sanchez *et al.* 2020）もある。ペルーは同国 EEZ 内の群は他と異なる単一の系群を形成するという前提に立って資源評価しており（IMARPE 2018、酒井 2019）、資源評価する単位や系群をどのように規定するかを明確にしつつ、国際的な資源管理に向けて遺伝的構造のさらなる解明が必要となっている。

小型の雌は外套長 20～27 cm で、雄は 15～18 cm で成熟する（Nesis 1983）。中型の雌は生後約 5 か月（外套長 30～40 cm）、雄は生後約 4 か月（20～30 cm）で成熟し、平衡石を用いた日齢査定の結果、寿命は 1 年と推定される（図 9 上）。体長は雌の方が雄よりやや大きい（増田ほか 1998）。大型の雌は外套長が 65～75 cm、雄は 50～65 cm で成熟する（Koronkiewicz 1988、増田ほか 1998）。大型の成長は 1 年間で約 80 cm と推定され（増田ほか 1998）、この成長率を採用するとアメリカオオアカイカは約 1 年半で最大体長（120 cm）に達することになる。寿命については、カリフォルニア湾で採集された外套長 80 cm の成熟雌の日齢が 450 日と推定

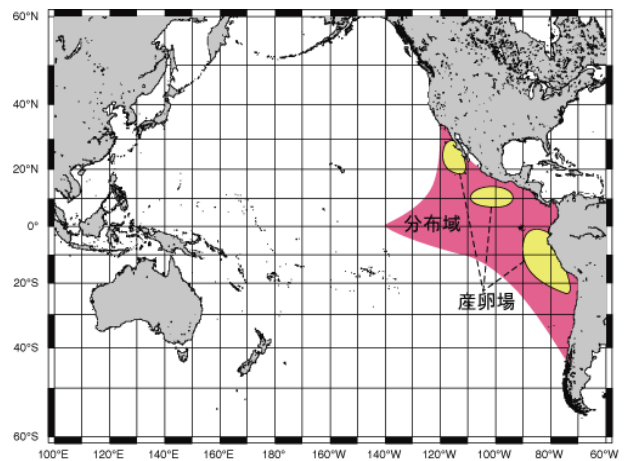


図 8. アメリカオオアカイカの分布

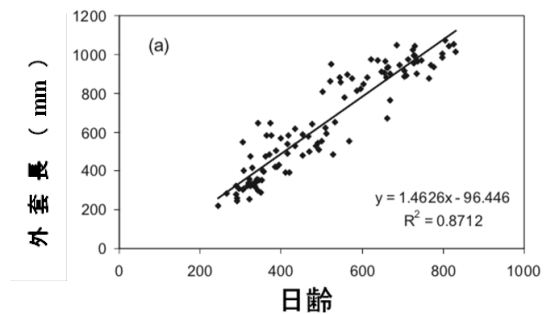
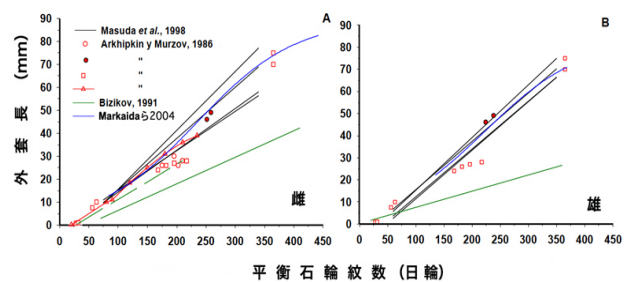


図 9. アメリカオオアカイカの外套長と日齢の関係  
上図：酒井・若林（2010）、下図：Arkhipkin *et al.*（2015）

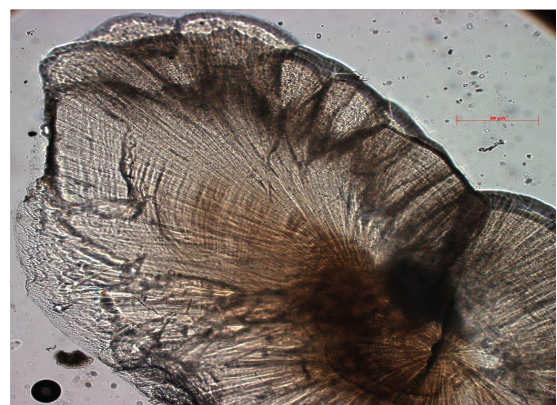


図 10. アメリカオオアカイカの平衡石にあらわれた日輪紋（外套長 105 cm の成熟雌）

されるもの（Markaida and Sosa-Nishizaki 2004）や、改良された平衡石日齢査定を行った研究では外套長が 1 m を超えるような個体は寿命が 1.5～2 年であると示すもの（図 9 下）（Arkhipkin *et al.* 2015）、ペルー海域で漁獲された外套長 105

cmの成熟雌の輪紋数が300~330本程度(図10)で寿命は約1年と推測されるもの等、本種の寿命については意見が分かれている。

漁獲される本種の外套長サイズには年代によって大きな変動が認められ、ペルー海域で商業いか釣り漁船によって採集された成熟雌の外套長は、1999年以前には平均で30~40cm前後であったが、それ以降は大型化して2004年には90cmを超えるようになった(図11)(加藤ほか2010)。この要因として、2000年から2004年にかけて沿岸湧昇域の生産性が高く、本種が豊富な餌を利用できたことで外套長サイズが大型化した可能性が考えられている(Arguelles et al. 2008)。ペルー海域で漁獲された個体の平均外套長は2015年前後から小型

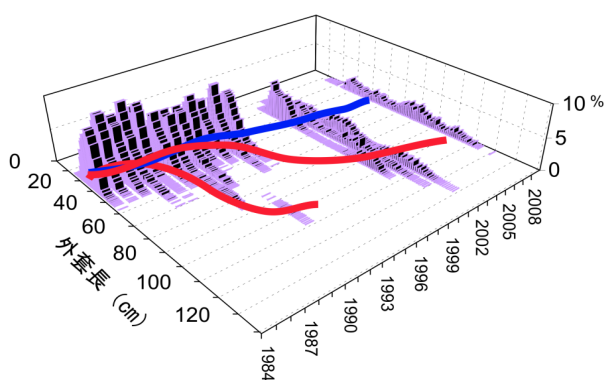


図11. 開発調査センター調査船(ペルー海域)にて採集されたアメリカオオアカイカの成熟雌の外套長の年変化(加藤ほか2010)

赤い曲線は大型群の出現パターン、青い曲線は中小型群の出現パターン。

化が確認されている(IMARPE 2022)。ペルー沖合で大型の本種(外套長約74cm及び110cm)を用いたバイオテレメトリー調査によって、本種の遊泳深度が昼間には溶存酸素量が極端に減少する水深1,200mに達することが示された(図12)(Sakai et al. 2017)。

本種の食性は発育段階により異なり、小型個体は主にオキアミ類等のプランクトン、中型の個体は中深層性魚類のハダカイワシ科やウキエソ類(*Vinciguerria lucetia*)及びイカ類(共食い)を主餌料とする(ヤマシロほか1998, Arguelles et al. 2008)。特に、外套長20cm以上のアメリカオオアカイカの胃内容物からは、上記の中深層性魚類が最も多く出現し、60cmを超える大型の個体は共食いをしている(Markaida and

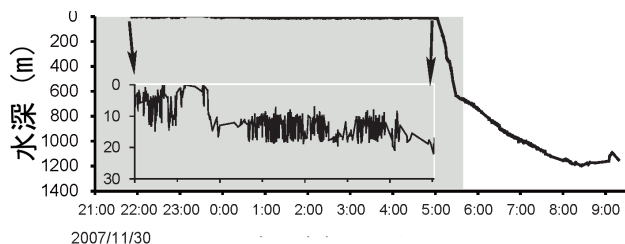


図12. バイオテレメトリーによる大型のアメリカオオアカイカの遊泳水深の追跡結果(Sakai et al. 2017)



図13. ふ化して間もない卵黄を持った外套長1.4mmのアメリカオオアカイカの稚仔(水産庁2009)

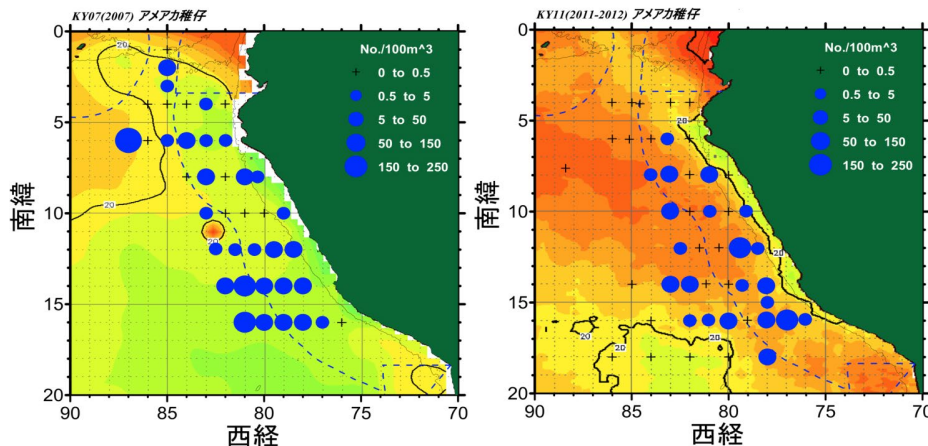


図14. 水産庁調査船「開洋丸」調査によって得られた2007年(左図)と2011/2012年(右図)におけるアメリカオオアカイカの稚仔の分布と量(水産庁2009, 2013)



Sosa-Nishizaki 2003)。チリ海域ではアメリカオオカイカによるメルルーサ（タラ類）やチリマアジ（Jack mackerel）の被害が指摘されている（Cubillos *et al.* 2004, Ulloa *et al.* 2006）。しかし、いずれもトロールやまき網漁船で得られた混獲標本から食性分析を行ったため、網内での偶発的な摂餌による大きな偏りが生じていて、実際にはニシン類やハダカイワシ類が多いと指摘されている（Ibanez *et al.* 2008）。一方、アメリカオオカイカの捕食者としては、キハダ、イルカ類、マッコウクジラ等が挙げられる（Perrin *et al.* 1973）。

本種のペルー沖での高密度分布域は周年にわたって南緯 3～10 度にあり、そこでは常に成熟した雌雄が活発な索餌活動を行っている。この高密度分布域は沿岸湧昇域であり、産卵場と索餌場が一致するため大規模回遊を行う必然性はなく、コストリカ沖でも、高密度分布域は北赤道海流と北赤道反流の間の湧昇域（北緯 8～10 度）に相当し、生産力が高く、産卵場と索餌場が一致する。適正産卵水温は 24～28℃の比較的高い温度帯と想定されてきており（Waluda and Rodhouse 2006）、メキシコカリフォルニア湾において 25～27℃の海域で直径が数 m もある卵塊が見つかった（Staaf *et al.* 2008）。他方、ペルー海域ではこれまで産卵場に関する情報は極めて少なかったが、迅速かつ簡便な DNA 分析手法の開発により、調査船上等でも種判別ができるようになり（若林ほか 2008）、水産庁調査船「開洋丸」による稚仔分布調査でふ化間もない本種稚仔（図 13）も含めた分布が確認された（水産庁 2009, 2013）。この結果、ペルー海域ではこれまで想定されていた水温帯（24～28℃）よりもかなり低い水温帯（18～20℃）で産卵していることが明らかになった。また、稚仔の出現密度は沿岸よりもやや沖合の方が高いことが示された（図 14）。本種の適正産卵水温の幅は、これまで考えられていたよりもかなり広い（18～28℃）と考えられる。船上での本種の人工授精ふ化実験によって 20 度の飼育環境ではふ化時間に約 6 日間要することが示された（Sakai *et al.* 2018）。

### 資源状態

#### 【アルゼンチンマツイカ】

アルゼンチン EEZ、英領フォークランド FICZ 及び隣接公海域を併せた総漁獲量から資源水準を考えると、2000 年以降、わずかに数年間で年間漁獲量が 100 万トン（2015 年）から 15 万トン（2016 年）まで変化し、近年の資源変動は極めて激しく、不安定になっていることを示している（図 15）。

アルゼンチン EEZ 及び英領フォークランド FICZ の漁獲量を指標として資源水準と動向を見た場合、2002～2022 年の 21 年間の最高漁獲量（48.5 万トン）と最低漁獲量（6.2 万トン）の範囲を 3 等分し（図 15）、低位、中位、高位とすると、2022 年の資源水準は中位と判断できる。2021 年以降、漁獲量は減少しているため、動向は減少傾向と考えられる。

アルゼンチン EEZ 内の月別の漁獲量の変遷をみると（図 16）、2009～2012 年にかけての低い水準から、2013 年以降にかけて増加傾向が示され、2013 年、2014 年に大豊漁となった。2016 年には 6.0 万トンと激減したが、2022 年は 16.7 万トン、2023 年は集計が終わっている 9 月までで 15.2 万トンとなっている（MAGYP 2023）。

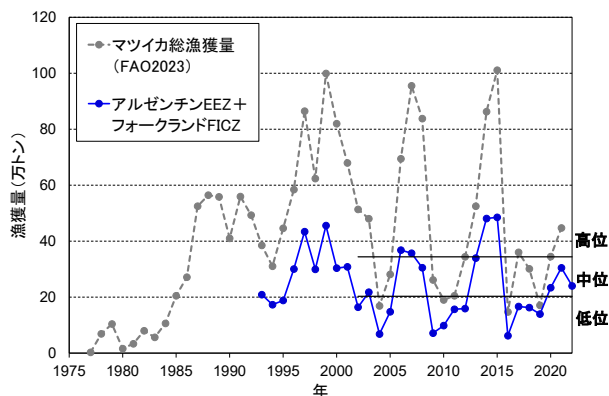


図 15. 1977～2022 年のアルゼンチン EEZ 及び英領フォークランド FICZ 内でのアルゼンチンマツイカの合計漁獲量と世界の総漁獲量の変遷（Falkland Islands Government 2023, FAO 2023, MAGYP 2023）

アルゼンチン EEZ 及び英領フォークランド FICZ 内の漁獲量を指標として資源水準と動向を見るために、2002～2022 年の 21 年間の最高漁獲量（48.5 万トン）と最低漁獲量（6.2 万トン）の範囲を 3 等分し、34.4 万トンより高い場合を高位水準、20.3 万トンより低い場合を低位水準とした。

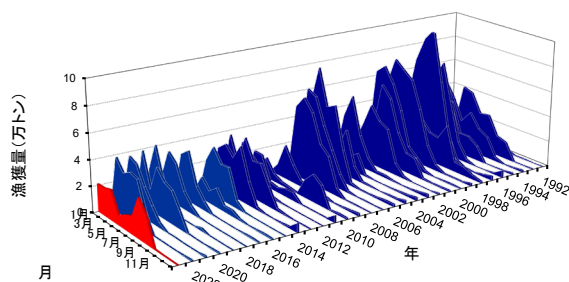


図 16. アルゼンチン EEZ のアルゼンチンマツイカの月別漁獲量の変遷（MAGYP 2023）

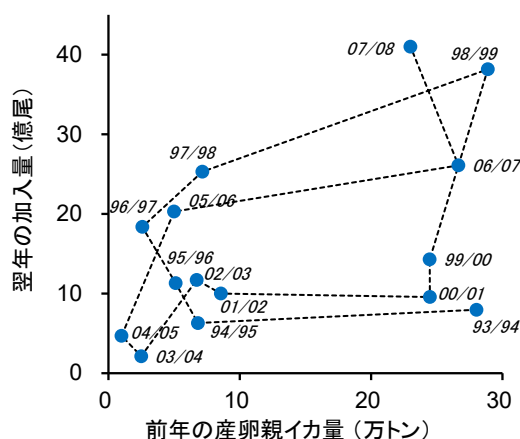


図 17. アルゼンチンマツイカの秋冬生まれ群（南パタゴニア系群）の再生産関係（酒井 2010）

なお、秋冬生まれ群（南パタゴニア系群）の産卵親イカ量と翌年の加入量との間には、周期的な変動は観察されるが、一定の再生産関係（親子関係）は見られない（図 17）。1998 年漁期には産卵親イカ量及び加入量ともに高い水準にあったが、

1999年漁期には産卵親イカ量は高い水準にあるにもかかわらず、翌年の加入量は低い水準（産卵成功率が低い）にあった。2005年までは、産卵親イカ量及び加入量とも低い水準にあった（酒井 2004）。

【アメリカオオアカイカ】

本種の漁獲量はエル・ニーニョ等の海洋イベントと関係があるとされており（Ichii *et al.* 2002）、1997/98年には前世紀最大規模のエル・ニーニョが発生し漁獲は減少したが、2000年以降は好漁に転じた。2021年にペルー政府機関により行われたベイズ型プロダクションモデル（BSP）を用いた資源評価では、2020年のペルー海域における同資源は減少傾向であるが、漁獲死亡係数は  $F_{MSY}$  水準よりも低く、乱獲状態には至っていないと評価された（IMARPE 2021）。しかし、2015～2016年のエル・ニーニョ傾向は過去30年で最も強く、アメリカオオアカイカ漁場の海洋環境に大きな変化をもたらしただけでなく、産卵場や索餌海域にも負の影響を及ぼした可能性もある。2016年5月頃にエル・ニーニョ傾向は収束したが、アメリカオオアカイカ資源への負の影響が回復するまでにはある程度の時間が必要と考えられる。メキシコ海域では2009年以降漁獲量が減少傾向にあったが、2015年に漁獲量が激減し回復しない状態が続いている（Frawley *et al.* 2019）。この要因としてエル・ニーニョ収束後も海水温が高い状態が継続しており、生産性の高い沿岸域への来遊が制限されて回遊経路が変化するとともに、生産性の低い熱帯生態系に対応するため小型化が進んだことが示唆されている（Frawley *et al.* 2019）。

2019年に開催された第7回 SPRFMO 本委員会において、本種の沿岸漁業国で設立された CALAMASUR（南太平洋アメリカオオアカイカ持続的管理委員会）は、本種の科学的な情報の欠如が資源評価を妨げているとした（SPRFMO 2019）。その内容として、生物学的な知識の不足、船舶位置監視システム（Vessel Monitoring system : VMS）の導入の遅れ、オブザーバープログラムによる生物学的データ収集の不足、適切な研究協力体制の不足、本種の保存管理措置の欠落、違法・無報告・無規制漁業（Illegal, Unreported and Unregulated Fisheries : IUU Fisheries）に対する対策の必要性等が提示された。またチリマアジのように、本種にも資源評価を議論するための科学者が率いる独立したグループを設立することも提案された（SPRFMO 2019）。2022年に開催された第10回 SPRFMO 本委員会での中国の報告書では、FAO 漁獲統計による各国・地域の漁獲量と中国・台湾・韓国の標準化 CPUE を用いて状態空間プロダクションモデルによる資源評価を行った結果、2020年の資源について乱獲状態にないことが報告されている（Li *et al.* 2022）。

管理方策

【アルゼンチンマツイカ】

本資源の大部分はアルゼンチン EEZ 及び英領フォークランド FICZ 内に分布し、両政府による資源管理が実施されている。本種には3ないし4個の季節発生群があるが、管理上は便宜的に南緯44度線で区切って南方資源と北方資源とに分けてそれぞれ異なる管理方策をとっている（図 18）。本資源の主体

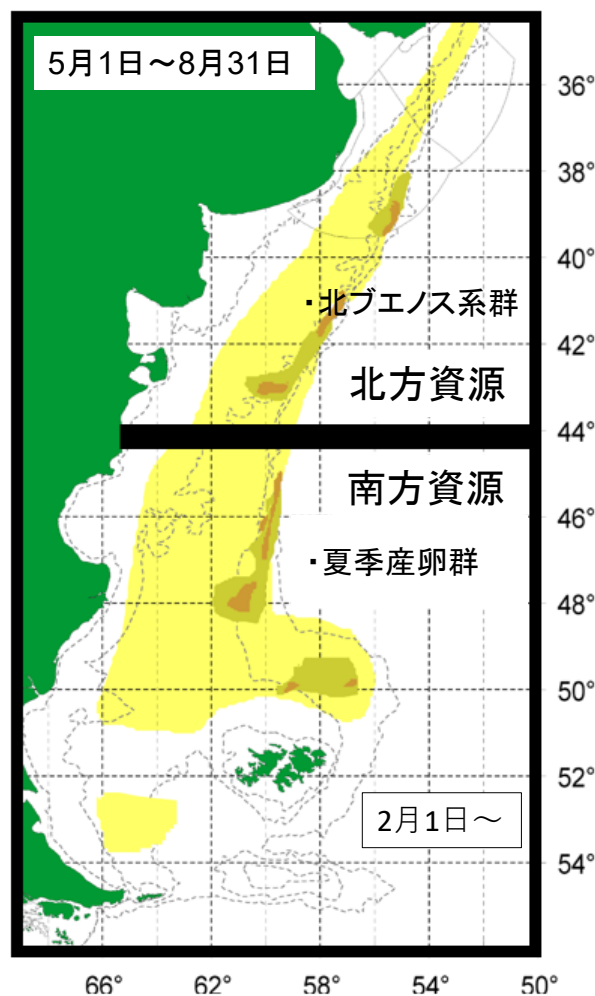


図 18. アルゼンチンマツイカの季節発生群（系群）と南緯 44 度を境とした資源分割管理

をなす秋冬生まれ群（南パタゴニア系群）である南方資源の資源評価は、両国を通じて漁期はじめの加入量（初期資源量）を DeLury 法に基づき推定する手法は共通である（Basson *et al.* 1996、Brunetti *et al.* 2000）。

北方資源（北ブエノス系群及び春季産卵群）は、実質アルゼンチンのみが管轄し、固定した漁期（5月1日～8月31日まで）と入漁隻数を制限する努力量管理方策を実施している。一方、資源規模の大きい秋冬生まれ群（南パタゴニア系群）を主体とする南方資源は、英国及びアルゼンチンの二国間の SAFC に基づき、両国が共同で管理（入漁隻数制限、解禁日2月1日、再生産管理）している。本種は単年性（年魚）であり、世代が重複することがないため、ある年の資源はすべて前年の産卵親イカから生まれてきた子である。このため、いわゆる親子関係（再生産関係）が想定されるが、実際にはある漁期に獲り残された親魚量と翌年の加入量との間の再生産関係は希薄である（Csirke 1987）。

しかし、管理の面ではある程度においては再生産関係が成立すると仮定し、「来漁期の資源にまわすための親魚を一定量確保する施策」が採用されている。これを相対逃避率による再生産管理と呼ぶ。南方資源は、この逃避率が一定の40%（経験値）となるように目標値を設けている。目標値に達すると終漁措置をとる等、南方資源ではリアルタイムで漁業をコントロー

ルする管理施策がとられている。逃避率の算出には、漁業が存在しない場合の仮想的な親魚の量(自然死亡係数だけで生き残って産卵に参加)を基準の100%とする。ある時点での逃避率は、この基準に対する“実際の漁業から逃避する親魚量”の割合として算出される。実際の相対逃避率の算出方法は英国とアルゼンチンでは若干異なる。英領フォークランド FICZ 内では比較的早くから本種の資源管理を実施してきた。具体的には、同海域で許可されて入漁して操業する全てのいか釣り船から週単位で報告される日別操業データ(漁獲量と努力量)を得る。この操業データの CPUE を用いて Leslie-DeLury 法によって加入量  $N_0$  や漁具能率  $q$  を推定し、仮定した自然死亡係数 ( $M = 0.06/\text{週}$ ) に基づき相対逃避率が算出される (Rosenberg *et al.* 1990)。一方、アルゼンチンでは、相対逃避率の算出過程において、商業データとして漁獲量のみを用いる。資源尾数は漁獲死亡係数と自然死亡係数により減少するという漁獲方程式を仮定し、次式(1)のように単位時間間隔の中間点毎で漁獲が行われるとする近似的な VPA 漁獲方程式 (Pope 1972) と同様に表される (Brunetti *et al.* 2000)。

$$N_{i+1} = [N_i e^{-(M/2)} - C_i] e^{-(M/2)} \dots \dots (1)$$

ここで、 $N_i$  は  $i$  週の初めにおける資源尾数、 $N_{i+1}$  は  $i$  週の終わりにおける資源尾数、 $C_i$  は  $i$  週における漁獲尾数(週の間中点)、 $M$  は自然死亡係数で実際には経験的モデルから推計された  $M = 0.06/\text{週}$  を仮定している。上記(1)式で、加入尾数に相当する  $N_i$  は ( $i = 0$  時における)、漁期初めに行われる漁業と独立したトロール調査船による掃海面積法から推定される。この加入尾数 ( $N_0$ ) と全漁船から週毎に報告される漁獲量(尾数に変換)を代入していき、次週の資源尾数が逐次前進計算されていく。こうして漁業の進行とともにその時点で生残している資源尾数  $N_{i+1}$ 、すなわち産卵親イカ尾数がリアルタイムで算出される。同時に、 $i$  週目における相対的な産卵親イカの割合を示す逃避率 ( $E_i$ ) は、漁業がない場合に自然死亡だけで生き残る産卵親イカ尾数に対する漁獲後に残り残された産卵親イカ尾数 ( $N_{i+1}$ ) の割合として次式(2)で計算される。

$$E_i = N_{i+1} / (N_0 e^{-iM}) \times 100 \dots \dots (2)$$

漁期の終了は、ここで計算される相対逃避率が 40% を割った時点でアルゼンチン国立漁業研究所 (INIDEP) が出す禁漁勧告に基づいて行われる。この逃避率の算出には漁獲努力量データや CPUE を必要とせず、漁船の努力量データを用いた加入量と漁具能率の推定値から逃避率を算出する英領フォークランド方式と異なる。

SAFC は 2001 年に相対逃避率による制限に加え、最低限の親イカ量を確保するための絶対的な逃避量として 4 万トン を勧告した (Barton *et al.* 2004)。なお英国では、SAFC が設立される以前 (1987~1991 年) の漁業データから得られる逃避親イカ量と翌年の加入量との再生産関係から、最低限残すべき産卵親イカ量 ( $SSB_{\min}$ ) を 3.2 万~6.4 万トンと試算している (Basson *et al.* 1996)。SAFC はアルゼンチン政府が参加を取りやめた 2005 年以降、機能が停止していた (Arkhipkin *et*

*al.* 2015) が、2018 年から再び共同管理が行われるようになった。2019 年に共同で行われたトロール調査データと商業船による漁獲量データをもとにした解析の結果、相対逃避率を 40%、逃避親イカ量のしきい値を 4 万トンとした場合、資源量は 26.3 万トンと推定され、ベイズ最適化モデルにより頑健な推定結果であることが示された (Winter 2019)。また本種の漁獲可能量はアルゼンチン EEZ で 9.1 万トン、英領フォークランド FICZ で 4.3 万トン (利用率 49%) との結果を報告している (Winter 2019)。但し、公海域での漁獲は考慮していない点に注意が必要である。

アルゼンチンのみで管理する北方資源及び同国と英国とが共同管理する南方資源は、ともに漁期を制限する努力量管理方式である。外国漁船の入漁許可隻数等の決定には政治的要素も含まれるが、基本的には 1 隻のいか釣り漁船が漁獲できる能力は一定と考え、前年の資源量水準から推察して当該漁期の入漁隻数が決められている。近年、公海域において主に中国船による IUU 漁業が増加し (Harte and Watson 2019)、EEZ 境界で百隻以上が操業しており、アルゼンチンの漁業関係者がアルゼンチン政府に対応を要望する等問題となっている (Jefatura de Gabinete de Ministros Argentina 2020, Woodill *et al.* 2021)。AIS による位置情報を用いた解析では、アルゼンチン EEZ 境界で操業する一部の外国漁船において、AIS 情報が 24 時間以上検出できなくなる船が存在し、AIS の電源を切り領海内で操業している可能性が指摘されている (Oceana 2021)。2020 年 6 月には中国農業農村部が公海域でのイカ資源の保全強化と中国遠洋漁業の持続可能な発展に関する通知を公表した (中華人民共和国農業農村部 2020)。通知では、公海域でのイカ資源の保全と管理のために、毎年 7 月 1 日から 9 月 30 日まで南緯 32 度から南緯 44 度、西経 48 度から西経 60 度の海域における中国船によるいか釣り操業の禁止、電子ログブックやオブザーバープログラム等の実施による漁業のモニタリング・管理の強化、他分野との協力を促進することによる IUU 漁業対策、操業時期や海域に関するイカ資源のモニタリング強化と禁漁期間の調整、公海域のイカ資源の保全と管理のための科学的調査と積極的な国際協力の強化等を求めている (中華人民共和国農業農村部 2020, Yu *et al.* 2021)。

#### 【アメリカオアカイカ】

ペルー政府は、自国の EEZ 内及び公海を含むペルー海域における本種の資源管理をプロダクションモデルにより算定された最大持続生産量 (MSY) に基づいて行っており、2023 年のペルー EEZ 内の漁獲割当は 58.1 万トンと決定されている (Ministerio de la Producción 2023)。主要沿岸国のペルーは、沿岸零細漁業者への保護対策として外国船だけでなく自国の中大型いか釣り船の操業を認めておらず、2012 年 1 月以降、当該水域での日本船の操業ができない状態となっている。ペルー国内ではトレーサビリティの確保と安全のために零細漁業者の漁船への VMS の導入が進められており (Presidencia de la República 2018)、2020 年 8 月には、IUU 対策としてペルー EEZ 外の公海で操業する外国船についても補給や乗組員の交代等でペルー国内の港を使用する場合、ペルー政府の用意した VMS を設置し、入港前までの 6 か月間の位置情報の提出が

義務付けられることとなった (Presidencia de la República 2020)。チリ EEZ 内では毎年の漁獲割当 (Quota) を決めており、2022 年の割当量は、20 万トンと決定された (Chilean Government 2023)。

一方で、ペルーやチリ沖の南半球東部太平洋の公海域では、中国船を中心とする外国のいか釣り漁船が制限なく操業を行い、中国だけで2014、2015年は年間30万トンを超える漁獲を続けていた。中国農業農村部は2020年6月にアメリカオアカイカにおいてもアルゼンチンマツイカ同様、公海域でのイカ資源の保全強化と中国遠洋漁業の持続可能な発展に関する通知を公表しており、毎年9月1日から11月30日まで北緯5度から南緯5度、西経110度から西経95度の海域における中国船によるいか釣り操業の禁止を求めている (中華人民共和國農業農村部 2020, Yu *et al.* 2021)。南太平洋公海域ではアメリカオアカイカ資源も検討魚種に含めた SPRFMO による南太平洋公海域における漁業資源の国際管理が始まっており、これらを通じた公海における適正なアメリカオアカイカの資源管理が必要であろう。

#### 【その他、イカ類 (カナダマツイカ、ニュージーランドスルメイカ)】

カナダマツイカは冬生まれ群の単一資源だが (Dawe *et al.* 2007)、カナダ主体の北部海域 (NAFO 海域 3+4) 及び米国主体の南部海域 (NAFO 海域 5+6) で分割して管理されている (Hendrickson and Showell 2019)。2022 年の TAC は、北部海域 (NAFO 海域 3+4) で 34,000 トン、南部海域 (NAFO 海域 5+6) で 38,156 トンとされた (Hendrickson 2022)。ニュージーランドでは単年生のイカ資源の評価は困難としつつ、2022 年の商業漁獲割当 (TACC) は、イカ釣りに対して 5,000 トン、トロール漁船には 77,120 トンとしている (New Zealand Government 2023)。

#### 執筆者

小型浮魚ユニット

水産資源研究所 水産資源研究センター

浮魚資源部 浮魚第3グループ

西澤 文吾・松井 萌・岡本 俊

水産大学校 海洋生産管理学科

若林 敏江

(一社) 漁業情報サービスセンター

酒井 光夫

#### 参考文献

Arguelles, J., Tafur, R., Taipei, A., Villegas, P., Keyl, F., Dominguez, N., and Salazar, M. 2008. Size increment of jumbo flying squid *Dosidicus gigas* mature females in Peruvian waters, 1989-2004. *Prog. Oceanogr.*, 79: 308-312.

Arkhipkin, A., Argüelles, J., Shcherbich, Z., and Yamashiro, C. 2015. Ambient temperature influences adult size and life span in jumbo squid (*Dosidicus gigas*). *Can. J. Fish. Aquat. Sci.*, 72: 400-409.

Barton, A.J., Agnew, D.J., and Purchase, L.V. 2004. The

Southwest Atlantic; achievements of bilateral management and the case for a multilateral arrangement. *In* Payne, A.I.L., O'Brien, C.M. and Rogers, S.I. (eds.), *Management of shared fish stocks*. Blackwell Publishing, Oxford. 202-222 pp.

Basson, M., Beddington, K.R., Crombie, J.A., Holden, S.J., Purchase, L.V., and Tingley, G.A. 1996. Assessment and management techniques for migratory annual squid stocks: *Illex argentinus* fishery in the Southwest Atlantic as an example. *Fish. Res.*, 28: 3-27.

Brunetti, N.E., and Ivanovic, M.L. 1992. Distribution and abundance of early life stages of squid (*Illex argentinus*) in the south-west Atlantic. *ICES J. Mar. Sci.*, 49: 175-183.

Brunetti, N.E., Elena, B., Rossi, G.R., Ivanovic, M.L., Aubone, A., Guerrero, R., and Bnenavides, H. 1998. Summer distribution, abundance and population structure of *Illex argentinus* on the Argentine shelf in relation to environmental features. *S. Afr. J. Mar. Sci.*, 20: 175-186.

Brunetti, N., Ivanovic, M., Aubone, A., and Rossi, G. 2000. Recusos y mantener - Calamar (*Illex argentinus*). *Pesquerías de Argentina, 1997-1999*: 103-116.

Chen, X., Liu, B., and Chen, Y. 2013. *Sthenoteuthis oualaniensis*, Purpleback Flying Squid. *In*: Rosa, R. Pierce. G. and O'Dor. R. (eds.), *Advances in Squid Biology, Ecology, and Fisheries Part II – Oegopsid Squids*. Nova Science Publication Inc. New York City, New York. 207-223 pp.

Chilean Government. 2020. CHILE ANNUAL REPORT SPRFMO-SCIENTIFIC COMMITTEE Jumbo squid (*Dosidicus gigas*). Undersecretariat for Fisheries and Aquaculture, Chilean Government. SPRFMO SC8-Doc27 Chile's Annual report (Jumbo squid). 15 pp.

Chilean Government. 2023. CHILE ANNUAL REPORT SPRFMO-SCIENTIFIC COMMITTEE Jumbo squid (*Dosidicus gigas*). Undersecretariat for Fisheries and Aquaculture, Chilean Government. SPRFMO SC11-Doc26 Chile's Annual report (Jumbo squid). 15pp.

中華人民共和國農業農村部 2020. 农业农村部关于加强公海鱿鱼资源养护促进我国远洋渔业可持续发展的通知. <http://www.gov.cn/zhengce/zhengceku/2020-06/03/5516936/files/fc68d18b4f1f4d4e807be00c90d2f1f.pdf> (2022年11月2日)

Csirke, J. 1987. The Patagonian fishery resources and offshore fisheries in the South-West Atlantic. *FAO Fish. Tech. Pap.*, 286. 75 pp.

Cubillos, L.S., Ibanez, C.C., Gonzalez, C.A., and Sepulveda, A.O. 2004. Pesca de jibia (*Dosidicus gigas*) con red de cerco entre la V y X Regiones, ano 2003. Informe final. Inst. Invest. Pesq. VIII Region, Talcahuano (Chile). 48 pp.

Dawe, E.G., Hendrickson, L.C., Colbourne, E. B., Drinkwater, K. F., and Showell, M. A. 2007. Ocean climate effects on the relative abundance of shortfinned (*Illex illecebrosus*) and long-finned (*Loligo pealeii*) squid in the northwest

- Atlantic Ocean. Fish.Oceanogr., 16: 303-316.
- Falkland Islands Government, 2021. Fisheries Department Fisheries Statistics, Volume 25, 2020. Stanley, FIG Fisheries Department. 98 pp.
- FAO. 2023. Fishery and Aquaculture Statistics. Global capture production 1950-2021 (FishstatJ). Download dataset Global Fishery and aquaculture Production Statics ver2023.14.2.  
<http://www.fao.org/fishery/statistics/software/fishstatj/en> (2023年8月25日)
- Fisheries New Zealand. 2023.  
<https://fs.fish.govt.nz/Page.aspx?pk=7&tk=100&sc=SKU> (2022年10月7日)
- Frawley, T.H., Briscoe, D.K., Daniel, P.C., Britten, G.L., Crowder, L.B., Robinson, C.J., and Gilly, W.F. 2019. Impacts of a shift to a warm-water regime in the Gulf of California on jumbo squid (*Dosidicus gigas*). ICES J. Mar. Sci., 76: 2413-2426.
- Global Fishing Watch. 2021. Analysis of the Southeast Pacific Distant Water Squid Fleet. GFW-2021-FA-SQUID2020. 52 pp.
- González Martín, A., 2021. The Chinese fishing army threatens Latin America. IEEE Analysis Paper 09/2021. 12 pp.
- Harte, M., and Watson, J. 2019. Closing the gap: Adding value to Falkland Island fisheries through the collective management of shared fish stocks. Final Report for the South Atlantic Overseas Territories Natural Capital Assessment. 35 pp.
- Hendrickson, L. 2022. Updates of NEFSC Survey Relative Biomass Indices and Catches for *Illex illecebrosus* through 2021. *Illex\_2021\_RTA\_WG\_Report\_TEXT\_FINAL\_V1*. 7 pp.  
[https://static1.squarespace.com/static/511cdc7fe4b00307a2628ac6/t/62d1aa0e4fa0022beb398791/1657907727011/c\\_Illex\\_2022\\_data\\_update\\_final\\_v2.pdf](https://static1.squarespace.com/static/511cdc7fe4b00307a2628ac6/t/62d1aa0e4fa0022beb398791/1657907727011/c_Illex_2022_data_update_final_v2.pdf) (2022年10月24日)
- Hendrickson, L.C., and Showell, M. A. 2019. 2019 Assessment of Northern Shortfin Squid (*Illex illecebrosus*) in Subareas 3+4. NAFO SCR Doc. 19/042. 38pp.
- Ibanez, C.M., Aranchiba, H., and Cubillos, L.A. 2008. Biases in determining the diet of jumbo squid *Dosidicus gigas* (D'Orbigny 1835) (Cephalopoda: Ommastrephidae) off southern-central Chile (34S-40S). Helgol. Mar. Res., 62: 331-338.
- Ichii, T., Mahapatra, K., Watanabe, T., Yatsu, A., Inagake, D., and Okada, Y. 2002. Occurrence of jumbo flying squid *Dosidicus gigas* aggregations associated with the counter current ridge off the Costa Rica Dome during 1997 El Niño and 1999 La Niña. Mar. Ecol. Prog. Ser., 231: 151-166.
- IMARPE (Instituto Del Mar Del Peru). 2018. Biología, estructura poblacional y pesquería de pota o calamar gigante (*Dosidicus gigas*) en el Perú. Bol. Inst. Mar. Perú., 33(2): 302-364.
- IMARPE (Instituto Del Mar Del Peru). 2021. Situación del calamar Gigante Durante el 2020 y perspectivas de pesca para el 2021.  
<https://www.gob.pe/institucion/imarpe/informes-publicaciones/2056728-informe-correspondiente-al-oficio-n-199-2021-imarpe-pcd> (2022年10月13日)
- IMARPE (Instituto Del Mar Del Peru). 2022.  
<https://www.gob.pe/institucion/imarpe/informes-publicaciones/3250952-situacion-del-calamar-gigante-durante-el-2021-y-perspectivas-de-pesca-para-el-2022> (2022年10月13日)
- Ivanovic, M., and Brunetti, N. 1994. Food and feeding of *Illex argentinus*. Ant. Sci., 6: 185-193.
- Jefatura de Gabinete de Ministros Argentina 2020. Informe 126 Honorable Cámara de Diputados de la Nación.  
[https://www.argentina.gob.ar/sites/default/files/informe\\_126\\_hcamara\\_de\\_diputados.pdf](https://www.argentina.gob.ar/sites/default/files/informe_126_hcamara_de_diputados.pdf) (2020年11月9日)
- 嘉数 清. 1982. 久米島におけるトビイカ釣り漁業. 昭和56年度組織的調査研究活動推進事業報告. 1-27 pp.
- 加藤慶樹・酒井光夫・若林敏江. 2010. 1-3サイズと分布(アメリカオオアカイカの生活史と資源変動の基礎). 平成18-20年度 交付金プロジェクト研究. 研究成果報告「アメリカオオアカイカの利用拡大に関する提案」. 独立行政法人水産総合研究センター. 11-12 pp.
- 経済産業省. 2023a. 令和4年度「いか」の輸入割当てについて. 34 pp.  
[https://www.meti.go.jp/policy/external\\_economy/trade\\_control/03\\_import/04\\_suisan/download/2023022801.pdf](https://www.meti.go.jp/policy/external_economy/trade_control/03_import/04_suisan/download/2023022801.pdf) (2023年9月20日)
- 経済産業省. 2023b. 令和4年度「いか」の輸入割当てについて(追加). 11 pp.  
[https://www.meti.go.jp/policy/external\\_economy/trade\\_control/03\\_import/04\\_suisan/download/2023022802.pdf](https://www.meti.go.jp/policy/external_economy/trade_control/03_import/04_suisan/download/2023022802.pdf) (2023年9月20日)
- Koronkiewicz, A. 1988. Biological characteristics of jumbo flying squid *Dosidicus gigas* caught in open waters of the Eastern Central Pacific from October to December 1986. ICES C. M. 1988, K: 42, 6 pp.
- 黒岩道徳. 1998. 海洋水産資源開発センターによる南東太平洋海域のアメリカオオアカイカ (*Dosidicus gigas*) 資源に関するイカ釣り調査の変遷. In 奥谷喬司(編), 外洋性大型イカ類に関する国際シンポジウム講演集. 海洋水産資源開発センター, 東京. 85-102 pp.
- Li, G., Cao, Y., XU, L., and Chen., X. 2022. Stock assessment of the jumbo flying squid in Southeast Pacific Ocean based on Bayesian state-space production model (2022). SPRFMO SC10-SQ04. 18pp.
- MAGYP (Ministerio de Agricultura, Ganadería y Pesca). 2023. Presidencia de la Nación, Pesca Marítima, Desembarques.  
[https://www.magyp.gob.ar/sitio/areas/pesca\\_maritima/desembarques/](https://www.magyp.gob.ar/sitio/areas/pesca_maritima/desembarques/) (2023年10月12日)

- Markaida, U., and Sosa-Nishizaki, O. 2003. Food and feeding habits of jumbo squid *Dosidicus gigas* (Cephalopoda: Ommastrephidae) from the Gulf of California, Mexico. *J. Mar. Biol. Ass. U.K.*, 86: 4162/1-16.
- Markaida, U., and Sosa-Nishizaki, O. 2004. Age, growth and maturation of jumbo squid *Dosidicus gigas* (Cephalopoda: Ommastrephidae) from the Gulf of California, Mexico. *Fish. Res.*, 66: 31-47.
- 増田 傑・余川浩太郎・谷津明彦・川原重幸. 1998. 南東太平洋海域におけるアメリカオオアカイカ *Dosidicus gigas* の成長と資源構造. *In* 奥谷喬司 (編), 外洋性大型イカ類に関する国際シンポジウム講演集. 海洋水産資源開発センター, 東京. 103-114 pp.
- 三木克弘・若林敏江. 2010. 資源利用構造 (総括と展望). 平成 18-20 年度 交付金プロジェクト研究. 研究成果報告「アメリカオオアカイカの利用拡大に関する提案」, 独立行政法人水産総合研究センター. 39-42 pp.
- 三木克弘・三木奈都子. 2021. 第 3 章 イカ IQ 制度の影響. *In* 三木克弘・三木奈都子 (編), イカ産業の展開と構造. 農林統計出版, 東京. 151-183 pp.
- Ministerio de la Producción. 2023. Resolución Ministerial N.º 253-2023-PRODUCE.  
<https://cdn.www.gob.pe/uploads/document/file/4914523/RM%20N%C2%BA%20253-2023-PRODUCE.pdf?v=1690635790> (2023 年 10 月 16 日)
- Ministry for Primary Industries. 2016. Q&As – Government Decision to Require Reflagging of Foreign-owned Fishing Vessels.  
<https://www.mpi.govt.nz/dmsdocument/7515/direct> (2022 年 12 月 20 日)
- NEFSC (Northeast Fisheries Science Center). 1999. Report of the 29th Northeast Regional Stock Assessment Workshop (29th SAW): Stock Assessment Review Committee SARC) Consensus Summary of Assessments. Northeast Fisheries Science Center Ref. Doc. 99-14, 347 pp
- Nesis, K.N. 1983. *Dosidicus gigas*. *In* Boyle, P.R. (ed.), Cephalopod life cycles Vol. 1. Academic Press, London. 215-231 pp.
- New Zealand Government 2023. Fisheries Assessment Plenary May 2023 Volume 1 – ARROW SQUID (SQU) P65-82.  
<https://fs.fish.govt.nz/Doc/25410/04%20SQU%202023.pdf.ashx> (2023 年 10 月 12 日)
- Nigmatullin, Ch. 1990. Resource and perspective of the fisheries of nektonic epipelagic squids in the world ocean. *Abstr. Commu. All-USSR Conf. on Reserve Food Biological Resources of the Open Ocean and the USSR Seas, Kaliningrad, Mar. 1990 Moscow*: 11-13 (in Russian).
- Oceana. 2021. Now You See Me, Now You Don't: Vanishing Vessels Along Argentina's Waters. 10 pp. DOI: 10.5281/zenodo.4893397
- Paredes, C.E. and De la Puente, S. 2014. Situación actual de la pesquería de la pota (*Dosidicus gigas*) en el Perú y recomendaciones para su mejora (ペルーのアメアカ漁業の現状と改善のための報告). Informe final proyecto mediano breve CIES PM-T1 (Octubre, 2014), CIES & USMP. 110 pp.
- Perrin, W.F., Warner, R.R., Fiscus, C.H., and Holts, D.B. 1973. Stomach contents of porpoise, *Stenella* spp., and yellowfin tuna, *Thunnus albacares*, in mixed - species aggregations. *Fish. Bull.*, 71: 1077-1092.
- Pope, J.G. 1972. An investigation of the accuracy of virtual population analysis using cohort analysis. *ICNAF Research Bulletin*, 9(10): 65-74.
- Presidencia de la República. 2018. Decreto Supremo N° 003-2018-PRODUCE. 10 pp.  
[https://cdn.www.gob.pe/uploads/document/file/127877/91757\\_1.pdf](https://cdn.www.gob.pe/uploads/document/file/127877/91757_1.pdf) (2022 年 11 月 1 日)
- Presidencia de la República. 2020. Decreto Supremo N° 016-2016-PRODUCE.4 pp.  
<https://busquedas.elperuano.pe/download/url/decret-o-supremo-que-modifica-el-decreto-supremo-n-016-2016-decreto-supremo-n-016-2020-produce-1880165-6> (2021 年 10 月 25 日)
- República de Chile, Ministerio de Economía, Fomento y Turismo. 2019. LEY NÚM. 21.134. MODIFICA LA LEY GENERAL DE PESCA Y ACUICULTURA, CON EL OBJETO DE REGULAR LA CAPTURA DE LA JIBIA.  
[http://www.subpesca.cl/portal//615/articles-103278\\_documento.pdf](http://www.subpesca.cl/portal//615/articles-103278_documento.pdf) (2022 年 11 月 1 日)
- Rosenberg, A.A., Kirkwood, G.P., Crombie, J.A., and Beddington, J.R. 1990. The assessment of stocks of annual squid species. *Fish. Res.*, 8: 335-350.
- 酒井光夫. 2004. アルゼンチンマツイカ: 2004 年マツイカ漁期の特徴および来年度の海外イカ漁海況見通し. 全国いか組合報, 435: 30-35.
- 酒井光夫. 2010. 生残過程から見た再生産関係の問題点. 月刊海洋, 42(4): 209-216.
- 酒井光夫. 2019. ペルーのアメリカオオアカイカ資源評価と Global Fishing Watch を活用した中国イカ釣漁船の動向. 平成 30 年度イカ類資源研究会議, 7-15.
- Sakai, M., Brunetti, N., Ivanovic, M., Elena, B., Aristizabal, E., Figueroa, D., Rossi, G., Albano, M., Tsuchiya, K., Asano, K., Yoda, Y., Tanimata, N., and Nemoto, K. 2007. A summary of The R/V Kaiyo Maru 2005 Cruise Report: Japan and Argentina joint study of the Argentine squid juveniles, *Illex argentinus*, in the Southwest Atlantic Ocean during September and November 2007. *Fishries Agency of Japan*. 139-224 pp.
- 酒井光夫・若林敏江. 2010. 生活史の概要 (アメリカオオアカイカ的生活史と資源変動の基礎). 平成 18-20 年度 交付金プロジェクト研究. 研究成果報告「アメリカオオアカイカの利用拡大に関する提案」, 独立行政法人水産総合研究センタ

- 一. 5-8 pp.
- 酒井光夫・栗山 哲・阿保純一. 2014. 2014 年台湾サンマ・イカ漁業の現況. 海洋水産エンジニアリング, 2014 年 11 月. 37-50 pp.
- Sakai, M., Tsuchiya, K., Mariategui, L., Wakabayashi, T., and Yamashiro, C. 2017. Vertical migratory behavior of jumbo flying squid (*Dosidicus gigas*) off Peru: Records of Acoustic and Pop-up Tags. JARQ, 51: 171-179.
- Sakai, M., Vijai, D., Yamashiro, C., and Wakabayashi, T. 2018. Observations on embryos and embryonic development from an egg mass of the jumbo squid *Dosidicus gigas* spawned under captive conditions. Bol. Inst. Mar. Perú, 33: 153-159.
- Salazar-Céspedes, C.M., Giampietri-Rojas, L.A., Alarcón-Vélez, J.R., and Thorne-Martínez, D. 2018. Guidelines for the adaptation and development of a Peruvian fleet specializing in the capture of jumbo flying squid *Dosidicus gigas*. Bol. Inst. Mar. Perú, 33: 266-284.
- Sanchez, G., Kawai, K., Yamashiro, C., Fujita, R., Wakabayashi, T., Sakai, M., Umino, T. 2020. Patterns of mitochondrial and microsatellite DNA markers describe historical and contemporary dynamics of the Humboldt squid *Dosidicus gigas* in the Eastern Pacific Ocean. Rev. Fish Biol. Fish, 30: 519-533.
- Sandoval-Castellanos, E., Uribe-Alcocer, M., and Díaz-Jaimes, P. 2010. Population genetic structure of the Humboldt squid (*Dosidicus gigas* d'Orbigny, 1835) inferred by mitochondrial DNA analysis. J. Exp. Mar. Bio. Ecol., 385: 73-78.
- 下光利明・加藤慶樹・高橋晃介・山下秀幸. 2019. 平成 29 年度海洋水産資源開発事業報告書 (いか釣〈北太平洋南西部海域〉), 国立研究開発法人水産研究教育機構開発調査センター. 147 pp.
- SPRFMO. 2019. 7th Annual meeting of the commission meeting report. 103 pp.  
<https://www.sprfmo.int/assets/2019-SC7/Reports/SPRFMO-SCW8-Report-2019.pdf> (2022 年 10 月 31 日)
- SPRFMO. 2023. Update of Squid Datasets held by the Secretariat. SPRFMO SC11-SQ01\_rev1 Squid information held by the Secretariat. 7 pp.
- Staaf, D., Camarillo-Coop, S., Haddock, S., Nyack, A., Payne, J., Salinas-Zavala, C., Seibel, B., Trueblood, L., Widmer, C., and Gilly, W. 2008. Natural egg mass deposition by the Humboldt squid (*Dosidicus gigas*) in the Gulf of California and characteristics of hatchlings and paralarvae. J. Mar. Biol. Assoc. U. K., 88: 759-770.
- Staaf, D.J., Ruiz-Cooley, R.I., Elliger, C., Lebaric, Z., Campos, B., Markaida, U., and Gilly, W.F. 2010. Ommastrephid squids *Sthenoteuthis oualaniensis* and *Dosidicus gigas* in the eastern Pacific show convergent biogeographic breaks but contrasting population structures. Mar. Ecol. Prog. Ser., 418: 165-178.
- 水産庁. 2009. 日本・ペルー共同アメリカオアカイカ資源調査. 平成 19 年度国際資源調査等推進対策事業, 水産庁漁業調査船『開洋丸』第 5 次調査航海 報告書. 177 pp.
- 水産庁. 2013. ペルー海域アメリカオアカイカ資源調査報告書. 平成 23 年度国際資源調査等推進対策事業, 水産庁漁業調査船『開洋丸』第 4 次調査航海 報告書. 206 pp.
- 当真 嗣誠. 1971a. トビイカ釣漁業試験. 琉球水試. 11-15 pp.
- 当真 武. 1971b. 琉球近海におけるトビイカ *Symplectoteuthis oualaniensis* (Lesson) についての基礎研究 - I, 漁獲量増大の可能性について. 琉球水試, 1970 年事業報告. 57-60 pp.
- 当真 武. 1971c. 琉球近海におけるトビイカ *Symplectoteuthis oualaniensis* (Lesson) の外套長, 体重組成について. 琉球水試, 1970 年事業報告. 61-64 pp.
- 当真 嗣誠. 1972. トビイカ釣漁業試験. 沖縄県水試事業報告, 1971 年度 34-39 pp.
- Trygg Mat Tracking 2022. Squid fishing in the Northwest Indian Ocean - Clear as ink. 18TH Working party on ecosystems and bycatch (Wpeb18), IOTC-2022-WPEB18-INF16\_rev1. 28pp.  
<https://iotc.org/documents/squid-fishing-northwest-indian-ocean-clear-ink> (2022 年 11 月 1 日)  
<https://iotc.org/documents/squid-fishing-northwest-indian-ocean-clear-ink> (2022 年 11 月 1 日)
- Tung, I.-H. 1976a. On the food habit of commons squid, *Symplectoteuthis oualaniensis* (Lesson). 南鱿食性之研究. 經濟部・国立台湾大学合辯漁業生物試験所報告, 3 : 49-66.
- Tung, I.-H. 1976b. On the reproduction of commons squid, *Symplectoteuthis oualaniensis* (Lesson). 南鱿生殖之研究. 經濟部・国立台湾大学合辯漁業生物試験所報告, 3 : 211-247.
- Tung, I.-H., Lan, C.-H., and Hu, C.-H. 1973. The preliminary investigation for exploitation of common squid resources. 南鱿資源開発予察調査. 經濟部・国立台湾大学合辯漁業生物試験所報告, 3 : 26-48.
- Ulloa, P., Fuentealba, M., and Ruiz, V. 2006. Haibitos alimentarios de *Dosidicus gigas* (D'Orbigny, 1835) (Cephalopoda : Teuthoidea) frente a la costa centro-sur de Chile. Rev. Chil. Hist. Nat., 79 : 475-479.
- 若林敏江・酒井光夫・張成年. 2010. マイクロサテライトマーカーによるアルゼンチンマツイカ交接個体の個体識別. DNA 多型, 18: 113-115.
- 若林敏江・柳本 卓・酒井光夫・一井太郎・小林敬典. 2008. アメリカオアカイカの船上での迅速種判別法. スルメイカ資源評価協議会報告 (平成 19 年度), 北海道区水産研究所. 13 pp.
- 若林敏江・柳本 卓・酒井光夫・一井太郎・三木克弘・小林敬典. 2009. mtDNA COI 領域を用いたイカ加工製品の原料種判別. DNA 多型, 17: 144-146.
- 若林敏江・酒井光夫・保尊 脩・長谷川誠三・佐藤仁美・川内 惇郎・大谷真司. 2016a. 冬季及び春季台湾東方沖合海域トビイカ分布量調査報告. 水産庁国際資源調査推進委託事業, 水

- 産庁調査船「開洋丸」第5次(平成26年度)及び第1次(平成27年度)調査航海. 水産庁漁場資源課・国立研究開発法人水産総合研究センター東北区水産研究所・独立行政法人水産大学校. 94 pp.
- 若林敏江・藤田知則・長谷川誠三・浅田里恵・Dharmamony Vijai・石井裕二・加藤慶樹・酒井光夫. 2016b. 春季フィリピン東方沖合公海域トビイカ資源調査報告. 平成28年度国際資源調査等推進対策事業, 水産庁漁業調査船「開洋丸」第1次調査航海. 水産庁. 57 pp.
- 若林敏江・藤澤 亮・酒井光夫. 2017. 塩基配列分析結果からみるイカ加工製品の原料種の変化. DNA多型, 25: 7-10.
- 若林敏江・三木奈都子・阿保純一. 2020. 塩基配列分析結果からみるイカ加工製品の原料種判別 - 2018年・2019年の現状 -. DNA Polymorphism 第29回学術集会抄録集, 41p.
- Waluda, C.M., and Rodhouse, P.G. 2006. Remotely sensed mesoscale oceanography of the Central Eastern Pacific and recruitment variability in *Dosidicus gigas*. Mar. Ecol. Prog. Ser., 310: 25-32.
- Winter, A. 2019. Shortfin Squid *Illex argentinus*, Joint Survey and Stock Assessment. Falkland Islands Fisheries Department, Stanley, Falkland Islands. 17 pp.
- Woodill, A.J., Kavanaugh, M., Harte, M., and Watson, J.R. 2021. Ocean seascapes predict distant - water fishing vessel incursions into exclusive economic zones. Fish Fish., Doi: 10.1111/faf.12559
- World Wide Fund for Nature, and Trygg Mat Tracking. 2020. Unregulated fishing on the high seas of the Indian Ocean. 55 pp. [https://wwfint.awsassets.panda.org/downloads/wwftmt\\_unregulated\\_fishing\\_on\\_the\\_high\\_seas\\_of\\_the\\_indian\\_ocean\\_2020.pdf](https://wwfint.awsassets.panda.org/downloads/wwftmt_unregulated_fishing_on_the_high_seas_of_the_indian_ocean_2020.pdf) (2022年11月1日)
- ヤマシロ, C.・マリアテギ, L.・ルビオ, J.・アルグレス, J.・タフー, R.・タイベ, A.・ラビー, M. 1998. ペルーにおけるアメリカオアカイカ漁業. In 奥谷喬司(編), 外洋性大型イカ類に関する国際シンポジウム講演集. 海洋水産資源開発センター, 東京. 115-122 pp.
- Yu, W., Fang, X., Liu, H., Feng Z., and Chen, X. 2021. The first closed fishing area and season for oceanic squids in the high seas. Aquat. Conserv. Doi: 10.1002/aqc.3707
- 財務省. 2023. 財務省貿易統計. <https://www.customs.go.jp/toukei/info/> (2022年9月20日)



主要な海外イカ類の資源の現況 (要約表)

種名	アルゼンチンマツイカ	アメリカオアカイカ
海域	南西大西洋	東部太平洋
世界の漁獲量 (最近5年間、 2017~2021年)*1	17.1万~44.7万トン 最近(2021)年:44.7万トン 平均:32.5万トン	76.4万~100.4万トン(全域) 最近(2021)年:100.4万トン 平均:89.7万トン
我が国の漁獲量 (最近5年間)	0トン*2	0トン(ペルー海域)*3
資源評価の方法	アルゼンチン EEZ 及び英領フォークランド FICZ の漁獲量を指標として資源水準と動向を評価 漁期ははじめの加入量を DeLury 法に基づいて漁期のリアルタイムで推定	ペルー海域におけるベイズ型プロダクションモデル(BSP)を用いた資源評価
資源の状態 (資源評価結果)	2002~2022年の21年間の最高漁獲量(48.5万トン)と最低漁獲量(6.2万トン)の範囲を3等分し、低位、中位、高位とすると、2022年の資源水準は中位。資源動向は減少傾向。	2020年のペルー海域における資源は減少傾向であるが、漁獲死亡係数は $F_{MSY}$ 水準よりも低く、乱獲状態には至っていない(IMARPE 2021)
管理目標	逃避率一定となる再生産管理:相対逃避率40%(ただし、資源水準が低い近年の場合は、絶対逃避量4万トンを適用)	2023年ペルーEEZ内: 漁獲割当58.1万トン 2022年チリEEZ内:漁獲割当20万トン
管理措置	・アルゼンチン EEZ 及び英領フォークランド FICZ が管理対象(公海は除く) ・南方資源(FICZを含む):入漁隻数制限、解禁及び終漁期(逃避率管理によってアルゼンチン EEZ 内及び英領フォークランド FICZ 内それぞれリアルタイムに決定) ・北方資源:入漁隻数制限及び漁期制限	ペルーEEZ 海域:外国漁船の80海里までの入漁制限(2011年)、 零細いか釣り漁船のみ操業許可
管理機関・関係機関	・1900~2005年、2018年~:SAFC ・2006~2019年:アルゼンチン政府及び英国政府がそれぞれの自国管理水域内で管理	SPRFMO、その他沿岸国(CALAMASUR)
最近の資源評価年	2022年	2020年
次回の資源評価年	未定	未定

\*1 FAO 統計に基づく \*2 2007年以降操業なし \*3 2012年以降操業なし